

開設された軍の治療は、薬も資材も無く、赤チンを先のすり切れた筆でつけるだけのものでした。

腕、左肩甲骨、腹部のガラスの破片による傷、ひざの火傷及び裂傷、体中ガラス破片の負傷、のどの腫れのための呼吸困難などで苦しみ、そのうちに下痢、発熱、頭髮脱落と生死の間をさまようこと二ヵ月、なんとか生き延び、翌二十一年二月日赤病院で受診しましたが、二、三ヵ月の生命と診断されました。しかし奇跡的に徐々に回復しました。

偏頭痛、腰痛、発作的な呼吸困難、腹部ガラス片残存、ケロイドなど、やや薄れて来たものの、まだ傷痕を残し、偏頭痛などは今でも悩まされております。私どもが初めて味わった苦しい経験を後世に残して、平和の一助ともなればなと思ひ筆をとり

ました。爆心地から八百メートルにて被爆。

